

まえがき

本書はビートルズの伝記ではない。公式な伝記は、古くは Hunter Davies が著した THE BEATLES、最近では THE BEATLES ANTHOLOGY、という形で読むことができる。ビートル個人による執筆 (I ME MINE)、その口述に基づく著作 (MANY YEARS FROM NOW) もある。加えて、マネジメントの一員や録音側のメンバーとしてビートルズのごく近くに存在していた人々による回想がいくつも出版されている。つまり、ビートルズとも関係者ともインタビューを行ったことがない私が出る幕ではないのだ。そのようなことを試みたとしても、所詮は、英米で出版された著作物の翻訳からの抜粋を編集したものができあがるだけであろう。

本書は、ビートルズというグループが活動していた当時、彼らが日本でどのように報道され、受け取られていたかを、私の個人的な観点から記述したものである。

私は昭和24 (1949年) に誕生した。学年は昭和25年の早生まれと同じ。大変な時に当たった、と同情されるかもしれない。ベビーブーム頂点の翌年に生まれた私の学年にとって、志望する高校への進学は困難だったし、大学入試はさらに厳しかった。大学の門が最も狭かった年だったのだ。浪人受験生の数が最大だったからである。そして、現役で入試を突破しても、入学してまもなく学園紛争の嵐が吹き荒れた。しかし、私は良いタイミングで生まれたと思っている。第2次世界大戦後の変動期に育つ過程で、古い価値観と新しい価値観の両方に接することができた。それでいて、悲惨な戦争を体験する必要はなかった。だが、最も幸運だったのは、多感な青年時代とビートルズがレコーディング・アーティストとして活躍した時期が重なったことである。

ビートルズが日本で音盤デビューしたのは、私が中学2年生だった1964年2月。そして1970年初頭まで彼らのグループ活動が継続した。最後の新譜が発表されたのは1970年5月 (日本では6月)。私は大学3年生だった。つまり、その6年間は私にとっては高校受験と大学受験の期間を含む時代だった。それにもかかわらず、一貫してビートルマニアックだった私の耳と目に、ビートルズの音楽、ニュース、映像がどのように届いたか、私の心は何を感じたか、私の周囲の状況はどのようだったか。本書において年度順に詳しく語りたい。

1960年代以降に生まれた読者は、既存の本やウェブページに書かれていない多くの事実を知ることになるだろう。具体的な例を挙げると、次のような事柄である：当時のヒットパレードの状況／日本における最初のヒット曲／当初ビートルズはなぜ多くの人から毛嫌いされたか／「ビートルズに夢中になったのは一クラスで片手の人数ほどの不良だけ」という噂は真実か／ビートルズの新譜発売や映画封切りに際するファンの熱狂ぶり／「武道館で演奏が聞こえなかった」という話は本当か／他のレコーディング・アーティストとの人気の比較。

私や私の友人の体験談も多く紹介している。あえて私のプライバシーの一端を公開することに踏み切ったのは、個人的な逸話を含めてこそ、当時の雰囲気などが読者に伝わると考えたからだ。例えば、私がファッションにおいてビートルズから受けた影響に触れるのは馬鹿馬鹿しいことかもしれない。だが、誰かが公然と告白しなければ、ビートルズが多数の若者に及ぼした影響が広範囲にわたったという事実が歴史から消えてしまう。

私と同年代の読者は比較的少ないと思われる。しかし、もしあなたがその一人であるならば、本書はあなたの記憶の細部を蘇らせる切っ掛けを提供することだろう。どんなに楽しい青春を過ごしたか、振り返って幸せな気分になって欲しい。

本書には新規の試みがもう一つある。それは私が作成した英国と日本におけるビートルズのディスコグラフィーだ。これまでにない体裁になっているのみならず、両者を異なるセクションに置くことによって完全にセパレートするようなことを避けている。また、時折、米国ディスコグラフィーの抜粋を挿入している。同じ時間の流れにおいて、ビートルズの新譜発表を世界的な観点から見ることに挑戦しているつもりなのだが、読者はどのように評価するだろうか？

過去の著作同様、本書についても、私は異論や批判などにオープンである。意見などがあれば、お聞かせ願う。

2014年5月
秋山直樹